9　底本の送り仮名が不足で読みにくいと思われる場合は、これを補った。
10　聞きなれない語や読み誤りやすい語には、ふり仮名をつけた。
11　人名や官職名などで慣習上「の」を入れて読むべきものは、底本の表記にかかわらず「の」を入れて示した。
12　反復記号はもとの文字にもどして表記したが、一字の漢字の反復は「々」で示した。
13　底本にある勘物・傍書・注記の類は省略した。

一、『紫式部集』の底本は、現存諸伝本中の最善本とされる実践女子大学図書館蔵の『むらさき式部集』を用いたが、実践女子大本一二六首に他本より（52）（125）の二首を補い、一二八首とした。

一、古本系『紫式部集』の中の数本には、巻末に「日記歌」として十七首が付されているので、宮内庁書陵部蔵の桂宮本によってこれを収載した。

一、『紫式部集』および「日記歌」の表記は、『紫式部日記』に準じた。

一、巻頭に「紫式部系図」、巻末に「解説」「紫式部年表」を付して学習・研究の便とした。

一、本書の本文校訂・頭注等に関しては、先学の諸注釈書や諸研究に負う所多く、また、底本の使用を許可された宮内庁書陵部および実践女子大学図書館には格別なるご配慮を賜った。明記して心より感謝の意を表するものである。

目次

凡例
紫式部系図
紫式部日記
［一］土御門邸の秋――寛弘五年七月中旬……二
［二］五壇の御修法……三
［三］朝露の女郎花……四
［四］殿の子息三位の君……四
［五］御盤のさま……五
［六］宿直の人々――八月二十日過ぎ……五
［七］宰相の君の昼寝姿――八月二十六日……六
［八］重陽の菊の着せ綿――九月九日……七
［九］薫物のこころみ――同日の夜……七
［一〇］修験祈祷のありさま――九月十日……八
［一一］安産を待ち望む人々――九月十一日……一〇
［一二］若宮ご誕生……一二
［一三］人々のよろこび……一四
［一四］御佩刀・御臍の緒・御乳付……一五
［一五］御湯殿の儀……一五
［一六］女房たちの服装……一七
［一七］三日の御産養――九月十三日の夜……一九
［一八］五日の御産養――九月十五日の夜……一九
［一九］月夜の舟遊び――九月十六日の夜……二三
［二〇］七日の御産養――九月十七日の夜……二四
［二一］九日の御産養――九月十九日の夜……二六
［二二］初孫をいつくしむ道長……二七
［二三］中務の宮家との縁……二八
［二四］水鳥に思いよそえて……二八

［二五］時雨の空……二九
［二六］土御門邸行幸――十月十六日……二九
［二七］管弦の御遊び、人々加階――同日の夜……三四
［二八］御産剃り、職司定め――十月十七日……三六
［二九］中宮の大夫と中宮の権の亮……三七
［三〇］御五十日の祝い――十一月一日……三八
［三一］八千歳の君が御代……四二
［三二］御冊子づくり――十一月中旬……四四
［三三］若宮の御成長……四五
［三四］里居の物憂い心……四五
［三五］中宮内裏還啓――十一月十七日……四八
［三六］殿から宮への贈物……五〇
［三七］五節の舞姫――十一月二十日……五〇
［三八］殿上の淵酔・御前の試み――二十一日……五二
［三九］童女御覧の儀――二十二日……五三
［四〇］左京の君……五五
［四一］五節も過ぎて……五七
［四二］臨時祭――十一月二十八日……五八
［四三］年末独詠――十二月二十九日の夜……六〇
［四四］晦日の夜の引きはぎ――十二月三十日の夜……六〇
［四五］新年御戴　餅の儀――寛弘六年正月……六二
［四六］人々の容姿と性格……六四
［四七］斎院と中宮御所……六八
［四八］和泉式部・赤染衛門・清少納言批評……七六
［四九］わが身をかえりみて……七八
［五〇］人の心さまざま……八一
［五一］日本紀の御局・楽府御進講……八三
［五二］求道の願いとためらい……八五
［五三］文をとじるにあたって……八六
［五四］御堂詣でと舟遊び……八七
［五五］人にまだ折られぬものを……八九
［五六］戸をたたく人……八九
［五七］若宮たちの御戴　餅――寛弘七年正月……八九
［五八］中宮の臨時客・子の日の遊び……九〇
［五九］中務の乳母……九二
［六〇］二の宮の御五十日――正月十五日……九二

紫式部集……九八
日記歌……一二四
解　説……一二九
紫式部年表……一四二

〔一〕 土御門邸の秋―寛弘五年七月中旬

一　立秋から二十日ほど経たころ。

二　左大臣藤原道長の邸。京極殿・土東門邸ともいう。道長の長女彰子中宮は、お産のため七月十六日からここに里下りしている。

三　寝殿造りの邸では南庭に池があり、中島や築山には樹木が多い。

四　庭に引き入れた人工の小川。

五　「艶」は風情があるさま。ここは夕映えの空のはなやいだ美しさ。

六　一昼夜を十二時に分け、十二人の僧が輪番で間断なく読経する。ここは中宮の安産祈願のため。

七　遣水のせせらぎの音が読経の声と。

八　一条天皇の中宮彰子。当年二十一歳。

九　「なやむ」は病気などで苦しむ意。中宮は妊娠九か月である。

一〇　平静を装っておられる中宮の周囲に対する思いやりある様子。

一一　平常の心。夫に死別した式部の常の気持は沈みがちであった。

一二　中宮のご様子のご立派さに、日ごろのもの憂い気分もすべて忘れ去っているという、自分の矛盾した心に気付いたいぶかり。

〔一〕秋のけはひ入りたつままに、土御門殿の有様、いはむかたなくをかし。池のわたりの梢ども、遣水のほとりのくさむら、おのがじし色づきわたりつつ、おほかたの空も艶なるに、もてはやされて、不断の御読経の声々、あはれまさりけり。

やうやう涼しき風のけはひに、例の絶えせぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。

御前にも、近うさぶらふ人々、はかなき物語するを、聞こしめしつつ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせたまへる御有様などの、いとさらなることなれど、憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまゐるべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし。

〔二〕 五壇の御修法

一　蔀格子。柱間に上下にはめこみ、上のは外側へ釣り上げる。

二　下級の女官。

三　女蔵人。下﨟の女房。

四　六時（晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜）の一つで、明け方の四時ごろ。

五　五大明王（不動・隆三世・大威徳・軍荼利夜叉・金剛夜叉）を五つの壇に請置して行う祈祷。

六　定められた勤行の刻限。

七　導師につき従う衆僧。

八　権僧正勝算。

九　寝殿の東の対屋。

一〇　真言密教で、手に印を結び、陀羅尼を唱えて行う祈祷。

一一　「法性寺」の誤りで、大僧都慶円か。

一二　馬場に面した建物。

一三　「浄土寺」の誤りで、権少僧都明救か。

一四　書物を納めてある建物。

一五　修法の時に着る僧衣。

一六　「さいさ」は斎祇の誤りか。

一七　五壇の西壇の大威徳明王。

〔三〕まだ夜ふかきほどの月さしくもり、木の下をぐらきに、「御格子まゐりなばや」「女官はいままでさぶらはじ」「蔵人、まゐれ」など、いひしろふほどに、後夜の鉦うちおどろかして、五壇の御修法の時はじめつ。われもわれもとうちあげたる伴僧の声々、遠く近く聞きわたされたるほど、おどろおどろしく、たふとし。

観音院の僧正、東の対より、二十人の伴僧をひきゐて、御加持まゐりたまふ足音、渡殿の橋の、とどろとどろと踏み鳴らさるるさへぞ、ことごとのけはひには似ぬ。法住寺の座主は馬場の御殿、へんち寺の僧都は文殿などに、うちつれたる浄衣姿にて、ゆゑゆゑしき唐橋どもを渡りつつ、木の間を分けてかへり入るほども、はるかに見やらるる心地して、あはれなり。さいさ阿闍梨も、大威徳をうやまひて、腰をかがめたり。

人々まゐりつれば、夜も明けぬ。